

スパルタ病理塾

あなたの臨床を変える！ 病理標本の読み方

小島伊織【執筆】

評者

市原 真

札幌厚生病院病理診断科

冒頭3ページ目で、私は早くも心をつかまれた。

「内科では『初めに疾患ありき』の内科学の他に『初めに症候ありき』の内科診断学を勉強する時間が学生時代に十分あったのに、病理については『初めに疾患ありき』の病理学の授業はあっても『初めに所見ありき』の病理診断学をしっかり勉強する時間は設けられていなかったのです」。

これが「序章」に書いてあって、私はいきなりぶっこんでしまった。なるほど、病理医にとっての症候診断学……いわば「病理所見学」の教科書か！ 心をわしづかみにされ、Amazon から本が届いたその日のうちに一気に読了、どころかなんと1日の間に2度通読してしまった。抜群のリーダビリティ。おまけに読みやすさだけではない、「覚えておきたくなる何か」が盛り込まれている。

本書の対象は医学生と臨床医である。一方の私は病理医だ。だからここに書かれている知識はすべて身につけているはずなのだが、とうに知っていて説明し慣れているはずの所見にも、「なるほど、こう語れば伝わりやすいのか」とい

う驚きがある。小島伊織先生の切り取ったカメラワークから病理の世界をあらためて見直すことに、大げさでなく感動を覚える。

組織所見に「ベクトル」の考え方を導入することは実におもしろい。

パターン分類を扱うタイミングがニクイ。

注釈により厳密な論を展開しつつも本文の方向性がぶれない語り口。

「手練れ」である。

読み始めてすぐの頃は、病理の所見などというニッチな本に世のニーズはないだろう、かわいそうだからせめて病理医である私はこの本を応援しよう……などと偉そうに案じていたが、余計なお世話だった。心配しなくても本書は確実に売れるだろう。その理由は、本書中で小島先生自身が看破されている。以下は、私による要約。

「これからはバーチャルスライドが発展するから、放射線科のPACS画像を多くの臨床医が気軽に閲覧できるように、病理画像もずっと手軽に見られるようになる。臨床医が自分の患者をよりよく知ろうと思うとき、病理の所見の見方を学んでおくことは必ず役に立つ」。



完全に同意だ。小島先生は病理医のキャリアを積みながら、救急当直や内科当直を並行して実践されてきたのだという。臨床と病理を橋渡しするために生まれてきたような人の渾身の著作を、多くの臨床医に推薦したい。

あまりにすばらしい本だから、意地の悪い私はアラ探しをしたくなる。しかし、ないのだ。用いられている組織写真の色温度が程よい。倍率も適切だ。弱拡大と強拡大のバランスには文句の付けようがない。症例選びのセンスが最高。ミニコラムが洒脱。肝臓内科医や呼吸器内科医、皮膚科医などが読んでも納得の知識量（臨床医向けだからといって無駄にカンタンにしすぎていないところがいい）。著者の近影を検索したところ普通にイケメン。巻末あとがきで妻子に感謝を述べる性格のよさ。病理医ヤンデルが膝から崩れ落ちる名著である。

A5判・頁206

2020年2月

定価：本体3,600円＋税

[ISBN978-4-260-04130-0]

医学書院刊